

トマス・アキナス『神学綱要』Compendium Theologiaeにおける神論①  
—第1章序言, 第1部第2章～第25章—  
Theology in 'Compendium Theologiae' by Thomas Aquinas, I: Japanese Translation of  
Chapter 1 and Chapters from 2 to 25 of Part I

山口隆介

Yamaguchi Ryusuke

要 旨

『神学綱要』はトマスの著作の中では、独立して言及されることのごく少ない著作である。近年では、『神学大全』、『定期討論集』などの著作と、なんらかのテーマについて併せ読むことで、トマスがそのテーマについてどのように考えていたかを明らかにするという研究で、読解を試みられることがある。管見では本書は、トマスの他の大きな著作での議論と、細部に違いが見られる議論を展開する著作である。ゆえに、この著作の内容の普及を期し、訳述を試みる。底本は Thomas Aquinas, *Compendium Theologiae*, in: *Opuscula Theologica* vol.I, Marietti, 1975 を用いた。Thomas von Aquin, *Compendium Theologiae*, *Grundriß der Glaubenslehre*, übersetzt von Hans Louis Fähr, Heidelberg, 1963 も併せて参照した。また各章タイトルの末尾の【 】内に『神学大全』における対応箇所を付した。この対応箇所は Fähr の独羅対訳本に依拠する。

**Key Words** : 『神学綱要』, *Compendium Theologiae*, 神論, 哲学的神論

神学綱要

彼〔トマス〕の最も高貴なる僚友たる兄弟レギナルドゥス<sup>1)</sup>に宛てて

第1章

序言

永遠の父の御言葉<sup>みことば</sup>はその測り難さを以ってすべてを包み、人間がその罪のために小さくなっているのを神の栄光の高貴さに呼び戻そうとしておられ、〔その道が〕短くなるように望まれたので、我々の短さ〔小ささ〕を受け入れられ、御自分の大いさを身に帯びたままではいなかった。

そして固く掴むべき天の言葉の教えから誰も締め出されることがないように、熱心な者たちに対し、聖なる書の様々な教えを通して、多岐にわたりかつ明晰に伝えてきたことを、それを業とする者向けには短い集成でもって人間の救いについての教えを締めくくった。

なぜなら、人間の救いは真理を知ることにより、様々な誤りのために人間の知性が暗くなつてはならないからである。（また人間の救いは）然るべき目的を目指すことにあり、誤った目的に向かって真の幸せを失つてはならないからである。〔また人間の救いは〕正義の遵守にあり、様々な悪徳で汚れてはならないからである。また〔御言葉は〕人間の救いに必要である真理認識を、短くコンパクトな信仰箇条にまとめられた。だからこそ使徒〔パウロ〕は、「ローマの信徒への手紙」第9章でこう言っているのだ。「地上では神は御言葉を短くされるだろう」。そして「これこそ信仰の言葉であり、我々はそれを述べ伝えよう」。

〔また御言葉は〕人間の意図を短い祈りで正しくされ、それ〔短い祈り〕によって我々に祈ることを教えられる時、我々の意図と希望が何に向かうべきかを示された。〔また御言葉は〕法の遵守という形で現れる人間の正義を一つの掟に集約された。「なぜなら法を満たすのは愛だからである」。そこで使徒〔パウロ〕は「コリントの教会への手紙」第13章で、信仰と希望と愛は、言わば我々の救いが要約されている主要なこととして現世の生の完成はすべてこれらのうちで成ると教える時、こう言ったのだ。「今は信仰、希望、愛が続く」と。それゆえこの三つは、聖アウグスティヌスが言うように<sup>2</sup>、それらでもって神が崇められているのである。

以上のような理由で、最も高貴なる兄弟ベルナルドゥス、あなたにキリスト教の教えを要約して、常に目の前に置いていられるように、あなたに送ろうと思うが、それは、この〔信仰、希望、愛の〕3つに関わることに、目の前の作品で我々〔つまり私とあなた〕の関心全体が向かっているからである。我々は最初に信仰を、次いで希望を、3番目に愛を扱うことにしよう。この順序で使徒〔パウロ〕も語っていたからであり、正しく考えればこう〔この順序に〕ならざるを得ないからである。すなわち、正しい愛が可能であるには、希望の然るべき目的が希望によって立てられなければならない、さらにこれ〔希望の然るべき目的が立てられること〕は、真理を知ることなしには可能でない。だから最初に必要なのは信仰である。それによってあなたが真理を知れるように。次いで必要なのは希望である。それによってあなたが然るべき目的に関心をおけるように。3番目に必要なのは愛である。あなたの情<sup>じょう</sup>がすべてそれ〔愛〕の秩序の下にあるように。

## 第1部

### 信仰について

#### 論考前半

#### 三一なる神、およびその業<sup>わざ</sup>について

## 第2章

### 信仰について語るべきことの順序

さて信仰は、将来我々を至福にするあの認識を、ある意味前もって味わうことである。だから使徒〔パウロ〕はこれを、「希望すべき事柄のより先にあるもの」<sup>3</sup>だと言う。その意は、我々のうちに希望すべきことを、すなわち将来の至福を、ある意味始まりの形で留まらせるものだということである。そして至福にする認識は 2 つのことに關して成立すると主は教えられた。すなわち神の三位一体とキリストの人性に關して。そこで〔ヨハネは〕御父<sup>おんちち</sup>に語ってこう言うのだ。「これこそ永遠の命、彼らはあなたが眞の神であることを知るだろう、そしてあなたが遣わされたイエス・キリストを」<sup>4</sup>。

それゆえ信仰による認識はすべて、この 2 つ、すなわち神の三位一体とキリストの人性を巡ってのものである。これは驚くに当たらない。キリストの人性はそれを通して神性に至らしめられる道だからである。したがって道中にあっては、目的地に至ることができるよう、道を知っておかなければならない。天国にて神の諸々の恵みの業<sup>わざ</sup>が満ちるには、〔人々が〕それを通して救われる道の認識を有していなければならない。だからこそ主は弟子たちにこう言われたのだ。「この私がどこに行くのかもあなたたちは知っており、道をもあなたたちは知っている」<sup>5</sup>。

神性を巡っては 3 つのことが知られねばならない。最初に本質の一性に關することが、次いでペルソナの三性に關することが、3 番目に神性による業<sup>わざ</sup>に關することが。

## 第3章

### 神とは何か【ST, I, q.2, a.3】

まず神の本質の一性に關しては確かに、最初に信すべきことは神であること、このことは理性にとって明らかである。なぜなら我々は、すべての動くものが他のものに動かされているということを見て〔知って〕いる。下位のもは確かに上位のものに動かされるのである。例えば、諸元素は天体によって〔動かされ〕、そして諸元素のうち、より強力なものがより無力なものを動かし、また天体のうち下位のもが上位のものに導かれている。ところでこのこと〔動かすものと動かされているものの系列〕は、際限なく進める〔または遡る〕ことができない。というのは、何かに動かされるものはすべて、言わば最初の動かすものの、ある意味道具である。最初の動かすものがなかったとすると、動かすものはどれも道具であったということになる。そしてもし、動かすものと動かされるもの〔の系列〕において無限に進む〔または遡る〕ことができるとすると、最初の動かすものはない、ということに必ずなる。したがって、無限の動かすものと動かされているものはすべて道具であったということになる。しかし、道具がなんらかの大元の動かすものに動かされる

のではないとすることは、無学な人々の間でも笑うべきことだ。というのはこのことは、箱や寝台を作るのに、鋸や斧は思い浮かべても、作業を行なう大工は抜きにするのと同じだから。したがって、最初の動かすものがあるということは必然である。これはすべてのものを超えて最高であるだろう。そしてこれを我々は神と言う<sup>6</sup>。

#### 第4章

##### 神が動かすことのできないものであること【ST, I, q.9, a.1】

以上から明らかに、すべてを動かす神は動かすことのできないものでなければならない。というのは、〔神は〕最初の動かすものであるのも、もし動いたとしたら、御自身によって動かされたか、あるいは他のものによって動かされたか、どちらかでなければならない。〔そして〕まず、他のものに動かされることはあり得ない。というのは〔仮に他のものに動かされたとする〕なんらかの動かすものが、彼〔神〕より先にあるということにならざるを得ないからであるが、こんなことは最初の動かすものという概念に反する。しかしもし御自身によって動かされるのなら、このことが可能になる道は2通りに分かれる。〔神は〕単一の観点からして〔同時に〕動かすものであり動かされているのであるというものと、また〔神は〕ある面では動かすものであり、ある〔別の〕面では動かされているのだから〔つまり神が動かすものであると看做される時と、動かされるものであると看做される時とでは、観点が別である〕というものと。

まずこれらのうち最初のもの〔神は単一の観点からして同時に動かすものであり動かされているのであるというもの〕はあり得ない。というのは、動かされるものはすべてその〔動かされているという〕限りでは可能態としてあり、他方動かすものは、現実態としてあるからだが、同一の観点からして〔同時に〕動かすものと動かされているものであったなら、必然的に同一の観点からして〔同時に〕可能態としても現実態としてもあるということになる。これは不可能だ。

続くもの〔神が動かすものであると看做される時と、動かされるものであると看做される時とでは、観点が別であるというもの〕もあり得ない。というのは、何か動かすものが、他の面では動かされているものであったとすると、それが最初の動かすものであるのは、それ自体としてではなく、その部分のうち動かすはたらきを為している部分のゆえだということになるからである。つまりそれ自体のゆえに存在するものは、それ自体のゆえに存在しているのではないものより先にあるので、したがってそのようなものは、その部分のゆえにこのこと〔動かすこと〕がそれに当てはまるということなら、最初の動かすものはあり得ないからである。

動かされつつ動かすものどもからなら、まさにこのことを考えることができる。というのは、運動はすべてなんらかの動かすことのできないものから発すると思われるからであ

る。これ〔最初の動かすもの〕はすなわち、運動そのものとして見る限り動くことがない。例えば我々が、〔月より〕下のものの中で起きる変化、生成、消滅が最初の動かすものとしての天体に遡るということを見て〔知って〕いるように、運動そのものとして見る限りこれ〔天体〕は動かない。生成することも、消滅することも、変化することもないからである。したがって、すべての運動の最初の根源なるものは、必然的にまったく動かすことのできないものである。

## 第5章

### 神が永遠であること【ST, I, q.10, a.2】

また以上からさらに、神が永遠であることが明らかになる。というのは、存在を始め、または終わるものにはすべて、運動あるいは変化という形でこのことが起きるからである。神がまったく動かすことのできないものであることは既に示されている。したがって〔神は〕永遠である。

## 第6章

### 神が御自身のゆえに存在するのは必然であること

また以上から、神が存在することは必然であることが示される。というのは、存在することもしないことも可能なものはすべて、動かすことができるものである。しかしながら、神は既に示したとおり、まったく動かすことができないものである。したがって神は存在することも存在しないことも可能なものではない。存在しており、かつ存在しないことが不可能なものはすべて、必然的に存在する。必然的に存在することと、存在しないことが不可能なことは同じ事を表しているからである。したがって神が存在することは必然である。

さらにまた、存在することも存在しないことも可能なものは、他の何かが自分を存在させてくれることを必要としている。それ自体のことだけを言うと、どちらにも関わっているからである。そして、何かを存在させるものは、それ〔その何か〕に先んじて存在している。したがって、存在することも存在しないことも可能なものにはすべて、何かが先んじて存在している。だが、神に何かが先んじているということはない。したがって〔神は〕存在することも存在しないことも可能なものではなく、必然的に存在している。また、或る必然的なものどもは、自らの必然性に原因があるが、〔この場合〕その原因は、そのものどもに先んじて存在しているのでなければならないので、したがって神の場合、すなわちすべてのものの最初のものの場合は、自らの必然性に原因がない。それゆえ、神はまさに御自分のゆえに存在することが必然である。

## 第7章

### 神は常に存在すること

また以上から明らかに、神は常に存在する。というのはその存在が必然であるものはすべて、常に存在するからである。存在しないことが可能でないものは、存在しないことが不可能であり、かつまた存在しない時というものがない。そして、すでに示されたとおりの神が存在することは必然である。したがって神は常に存在する。

さらに、運動または変化によらずして存在を始めるものや、存在をやめるものはない。そして神は、既に証明されたようにまったく動かすことができないものである。したがって〔神が〕存在を始めたということはあるに得ないし、また存在をやめるということもあり得ない。

さらにまた、常にあったのではないものはすべて、存在を始めるとしたら、それに対して存在の原因となるものを必要とする。自分自身を可能態から現実態へと引き出す、または自分自身を非存在から存在へと引き出すものはないからである。だが、神に存在の原因はあり得ない。〔神は〕第1の存在者であるというのに、原因は原因されたものに先んじて存在するからである。したがって、神が常に存在してきたということは必然である。

かつまた、何かに、それに対して外的ななんらかの原因によって当てはまるものは、それ自身のゆえに〔自ずから〕そのものに当てはまる。だが存在は神に、なんらかの外的な原因によって当てはまるわけではない。〔もしそんな原因があるとしたら〕その原因が彼〔神〕に先んじて存在したであろうから。したがって、神は、存在を御自身の力で有しているのである。しかし、自ずから存在するものは常に、必然性によって存在する。したがって、神は常に存在する。

## 第8章

### 神にどんな連続も存在しないこと

また以上によって、神にはどんな連続もあらず、その存在は全体が同時にあることが明らかになる。連続が見出されるのは、なんらかの仕方では運動変化に従うものだけだからであり、というのも、より先とより後が運動変化に際して時間の連続の原因となるからである。しかし、既に示したとおりの神は決して運動変化に従わない。したがって、神のうちはどんな連続も存在せず、その存在は全体として同時にある。

さらにまた、なんらかのものの存在が、全体として同時にはないという場合、それにおいて何かが減ぶことが可能であるということになる。というのは、過ぎていくものは減ぶるからである。そしてそれに〔何か〕付け加わることも可能である。すなわち、未来において期待されているものが。しかしながら、神においては何もかも減びず、付け加わる



こともない。〔神は〕動かすことのできないものだからである。したがって、その〔神の〕存在は全体が同時にある。

また以上の2点から、〔神が〕語の本来の意味で永遠であることが明らかになる。なぜなら、本来の意味で永遠であることは常にあること、そしてその存在が全体として同時にあることであるからだ。だからボエティウスはこう言う。「永遠とは、果てしない生の全的かつ同時的かつ完全な所有である」<sup>7</sup>。

## 第9章

### 神は単純であること【ST, I, q.3, a.7】

そこからしてまた明らかになるのは、最初の動かすものは単純であらねばならないということである。すなわち、すべての複合には2つのものが存在し、お互いに可能態の現実態に対する関係にある。ところで最初の動かすもののうちには、それがまったく動かすことができないものであるなら、可能態が現実態と共にあることは不可能である。すなわちどんなものでも、まさに〔それが〕可能態であるからこそ、動かすことができるものなのである。したがって、最初の動かすものが複合されたものであることは不可能である。

さらに、すべての複合されたものに対しては、何かが先んじて存在していなければならない。すなわち、複合されたものには、当然ながら、複合するものが先んじて存在していなければならない。したがってかの、すべての存在するもののうちで第1のもの〔神〕が複合されたものであることはあり得ない。複合されたものからなる秩序のうちでも、より単純なものが先んじて存在していることを、我々は見て〔知って〕いる。すなわち、〔例えば〕諸元素は当然、混合された物体に先んじて存在している。

さらにまた、諸元素のうちで第1のものは火であるが、これは〔諸元素の中では〕最も単純なものである。またすべての元素に先んじて天体が存在し、これはより大なる単純さで創り上げられている。〔天体は〕すべての対立から離れて純粹だからである。したがって〔結論として〕残るのは、存在するもののうち第1のものがまったく単純であるということである。

## 第10章

### 神がその本質であること【ST, I, q.3, a.3】

また〔以上から〕さらに、神がその本質であることが帰結する。というのはどんなものの本質でも、それはそのものの定義が表し示すものに他ならないからである。また、これ〔定義が表し示すもの〕は、定義が与えられているものと同一である。非必然的な要因さえなければ、これはすなわち、定義を与えられたものに何か定義にないことが非必然的に

起きるということである。例えば、人間に対して白さということ、〔人間が白いということ〕が、理性的な可死的動物という〔人間の定義に含まれている〕こと以外に非必然的に起きる時、理性的な可死的動物は、人間とは同一であるが、白い人間とは、白いものであるということに関しては同一でないように、したがってどんなものであれ、そのうちに1つはそれ自身によって存在し、もう1つは他のものによって存在しているという2つのものを見出すことの無いもののうちでは、必然的にその本質はまったくそのものと同一である。そして、神のうちには、〔神は〕既に示されているように単純であるので、1つはそれ自身によりもう1つは他のものによるという2つのものを見出すことはない。したがって、その〔神の〕本質は必然的に、御自身とまったく同一である。

さらにまた、どんなものであれ、本質が、その本質を持つものとまったく同一であるというのではないもののうちには、何か可能態であるものと現実態であるものとが見出される。すなわち、本質はその本質を持つものに対し形相として関わっている、すなわち人間性が人間に対するように関わっているのである。そして、神のうちには、可能態と現実態が見出されることはなく、〔神は〕純粹現実態である。それゆえ〔神は〕その本質そのものである。

## 第11章

### 神の本質はその存在に他ならないこと【ST, I, q.3, a.4】

さらにまた〔以上のことから〕必然的に、神の本質はその存在に他ならないということになる。というのはどんなものであれ、その本質と存在とが別であるものでは、「それがある」ということと、それがそれにおいて「何かである」ということとは別でなければならない。すなわち、なんについてでもその存在によっては「それがある」ということが言われるが、しかしなんについてでもその本質によっては「何であるか」ということが言われる。またそれゆえ、定義が本質を表すということは、そのものが何だということを明らかにするということなのである。しかし、神の場合「それがある」ということとそれにおいて「何かである」とは別ではない。既に示されたとおり、神のうちに複合はないからである。したがってそこでは、その本質はその存在と別ではない。

さらにまた、既に示されているように、神は純粹現実態であってどんな可能態性の混入もない。したがって必然的に、その本質は究極の現実態である。すなわち、究極を巡る現実態はすべて、究極の現実態への可能態にある。また究極の現実態は存在そのものでもある。というのはすべての運動は可能態から現実態への出口であるから必然的に、究極の現実態こそ、すべての運動のそれへと向かうものであるということになる。そして、自然の運動が向かうのは自然に欲せられているものであるもので必然的に、究極の現実態はすべてのものが欲しているものであるということになる。そして存在がこれである。したがって



神の本質は、すなわち純粹現実態にして究極の現実態は、存在そのものでなければならぬ。

## 第12章

### 神は類のもとにその種としてあるのではないこと【ST, I, q.3, a.5】

またここで、神は類のもとにその種としてあるのではないということが明らかになる。すなわち種差が類に加わると種を構成するので、それゆえにどんな種の本質でも何か類にさらに加えられている。しかしながら存在そのもの、すなわち神の本質は、そのうちに何も他のものに加わっているものを含まない。したがって、神がなんらかの類に属する種であることはない。

さらにまた、類は種差をその潜在力において含んでいるので、類と種差から成るものはすべて可能態が混入した現実態である。また既に示されたことだが、神は可能態の混入のない純粹現実態である。それゆえに、その本質は類と種差とから成ることなく、そして類のもとにない。

## 第13章

### 神が何かあるものの類であることの不可能であること

さらにまた〔以上からは〕神が類であることもあり得ないことが示されている。というのは類からは、その事物が何であるかが受け取られるが、その事物が存在することは受け取られないからである。すなわち、種を特徴付ける違い〔種差〕によって、事物はその固有の存在において成立するのであるが、まさに神こそは存在そのものだからである。したがって〔神が〕類であることは不可能である。

さらにまた、類はすべてなんらかの種に種別される。しかしながら、存在そのもの〔すなわち神〕が、なんらかの種差を受け取ることはない。というのは、種差は非必然的にでないかぎり、すなわち種差によって構成された種が類を分有するのでないかぎり、類を分有することはないからである〔このようなことはあり得ない〕。また、どんな種差も、存在を分有していないなら、存在することはできない。というのは存在しないものの種差は存在しないものだからである。したがって、神が類であり、多くの種について述語とされるということは不可能である。

## 第14章

### 神は多くの個物について述語とされるなんらかの種でないこと

また〔神が〕1つの種として、多くの個物について述語とされるということも不可能である。種の本質において一致している様々な個物は、何か種の本質以外のものによって区別される。例えば、人間が人間性という点で一致しているが、人間性という見方以外のもので互いに区別されるように。しかし、このことは神の場合は起こり得ない。すなわち既に示されているように、その本質が神御自身だからである。したがって神が多くの個物について述語とされる種であるということとはあり得ない。

さらにまた、複数の個物が1つの種のもとに含まれながら、存在に関しては〔互いに〕違っており、またしかしながら1つの本質において一致している。したがって複数の個物が1つの種のもとにあるならどんな場合でも、既に示されたように、存在と種の本質とは別でなければならない。したがって、神が複数のものに述語とされる、なんらかの種であることは不可能である。

## 第15章

### 神は一であると言わなければならないこと【ST, I, q.11, a.3; q.103, a.3】

またこのことから、神がただ唯一であらねばならないことも明らかになる。すなわち、多くの神々がいるとすると、それは同名同義的な意味でか、同名異義的な意味でかのどちらかである。同名同義的な意味だとすると、そのような発言は意味をなさない。我々が石と呼ぶものを、別の人が神と呼んでもかまわないからである。また同名異義的な意味でだとすると、必然的に類にも種にも当てはまることになる。そして、神が類でも複数のものを含んでいる種でもあり得ないことは既に示されている。それゆえ、複数の神々が存在しないことは不可能である。

さらにまた、共通の本質が分割される、すなわち、2つに分かれることのないものが複数のものに当てはまるということとはあり得ない。だから、たとえ複数の人間が存在することが可能でも、この人間が存在するというのは、唯1人〔のこの人〕というあり方で〔のみ可能であり、そうで〕なければ不可能である。そして、神の本質はそれ自体として自ずから分割不能であり、神においては本質と存在することとは別ではない。それは、既に示されたとおり、神は御自身の本質だからである。したがって、神は唯一のものとして以外のあり方で存在するということは不可能である。

さらにまた、形相が多数化するということには2重の意味がある。1つの意味では、種差によって、類的形相として〔多数化する〕。〔赤色や青色といった〕様々な種類の色に分かたれた〔類概念としての〕色のように。別の意味では、実在する基体によって、例えば〔先に挙げた色の例、あるいはさらに前で挙げた人間の色の例で言う〕「白さ」のように〔多数化する〕。したがって、種差によって多数化しえない形相はすべて、実在する基体の形相でないなら、多数化することとはあり得ない。例えば、白さが、仮に基体なし〔の状態〕に

留まったとしたら、唯一でなければならないように。そして、神の本質は存在そのものであり、これは既に示されたように、種差を受け取ることがない。したがって、存在そのものというこの神的なものは、言わば自ずから実在する形相であり、神は自分自身の存在そのものであるので、神の本質が唯一でないということは不可能である。したがって、多くの神々が存在することはあり得ない。

## 第16章

### 神が物体であるのは不可能であること【ST, I, q.3, a.1】

また〔以上のことから〕さらに、神御自身が物体であるのは不可能なことも明らかになる。すなわち、すべての物体にはなんらかの複合が見出される。すなわちすべての物体は部分を有している。したがって、まったく単純なものは、物体ではあり得ない。

さらにまた、どんな物体も運動が見出されるのは、まさにそれが動いている最中、〔運動を〕導くものに全体が明らかである場合だけである。したがって最初の動かすものがまったく動かすことのできないものなら、彼〔神〕が物体であることは不可能である。

## 第17章

### 〔神が〕物体の形相あるいは物体における力であるのは不可能であること【ST, I, q.7, a.1】

また、彼〔神〕が物体の形相であること、あるいは物体におけるなんらかの力であることは決してあり得ない。すべての物体が動かすことのできるものであるのは明らかなので、物体が動いている時、物体に属している諸々のものは、少なくとも偶有的には動かされている。しかし、最初の動かすものは、自分からでも、非必然的に〔自分の中にある理由で、外から動かされて〕でも、動かされることはあり得ない。彼〔神〕は、すでに示されたとおり、まったく動かし得ないものでなければならないからである。したがって〔神は〕形相でも、物体における力でもあり得ない。

さらにまた、すべての動かすものは、動かすものである限り、動かされるものに対して支配権を有している。我々が見て〔知って〕いるように、動かす力が動かされ得るものの力を超えている時、運動はより速やかだからである。したがってすべての動かすもののうち第1であるものは、動いているものに対して最大度の支配を行なっていなければならない。しかし、仮に〔神が〕動かし得るものになんらかの仕方結びついていたら、このようなこと〔神が最大度の支配を行なうということ〕はあり得なかっただろう。〔そして神が〕その形相あるいは力であるならば、〔これは神が動かしうるものに結びつくことなので〕そうなること〔すなわち、神が最大の支配度を行ない得ないということになるの〕は必定である。

したがって必然的に、最初の動かすものは物体でもなければ、物体における力でも、物体における形相でもない。このことゆえに、アナクサゴラスは知性を、すなわち〔すべてのものに〕命じてすべてを動かすということのゆえに、混合されざるものとしたのである。

## 第18章

### 神は本質に関して無限であること【ST, I, q.7, a.1; III, q.10, a.3, ad1】

以上のことからさらに、彼〔神〕が無限であることを考えることができる。〔ただし〕欠如的に〔ではなく〕、つまり〔「無限」を欠如と看做して考えるのではなく〕、「無限」は量を受けることであるという意味で、すなわち「無限」なものを本性的に、それ固有の本質においては限界を有するが、現在のところ限界を有していないという意味で語られている〔語〕として〔考えるの〕ではなく、否定的に、すなわち「無限」なものを決して限界付けられることのないものという意味で語られている〔語〕として〔考えることができる〕。なぜなら、現実態を限界付けるのは明らかに、〔形相を〕受容する力である可能態に他ならない。すなわち、形相が質料の受容する可能態に即して制限されるのは、我々にとっても明らかである。したがって、最初の動かすものが可能態の混合なき現実態であるなら、なんらかの物体の形相ではなく、物体における力でもないの、それ〔最初の動かすもの、すなわち神〕は無限であらねばならない。

このことはまた、諸々の事物の間で見出される秩序が証明する。すなわち、諸々の存在者のどれでも、それがより崇高であればあるほど、それ自身のあり方でより大いなるものとして見出される。つまり、より上位の諸元素の間では、量においてより大いなるものとして見出される。〔それだけでなく〕単純さにおいても同様だが。このことはそれら〔諸元素〕の生成が証明する。重層的でさまざまな割合で、火は空気から生じ、空気は水から生じ、水は地から生ずる。また天体は明らかに、諸元素の総量を超えている。したがって、存在者すべてのうち第1のものにして、それに先んじて他のものは存在し得ないものが、無限の量を有するものとしてそれ自身のあり方で実在することは必然である。

また、単純にして物体としての量を欠いているものが無限とされるなら、そしてその測り難さで物体の総量を超えているとされるなら、我々の知性は、非物体的でかつ単純であるから、全物体の量をその認識の力で超えているのである。したがって、すべてのもののうち第1のものの場合はなおもさらに、その測り難さですべてを超える。すべてを包括するという仕方である。

## 第19章

### 神は無限の力を有すること【ST, I, q.25, a.2】

またここから、神が無限の力を有することが明らかになる。力はものの本質を現実の行為として表すから、すなわち、どんなものでも、そのあり方にしたがって行為するのである。したがって、神がその本質によって無限であるなら、その力は必然的に無限である。

以上は、諸物の秩序を注意深く観察するなら明らかである。すなわち可能態においてあるものはなんでも、このこと〔可能態においてあること〕に応じて、受容の、あるいは受動の力を有しているが、一方これと同じく、現実態においてあるものは、活動の力を有している。したがって、可能態においてのみあるもの、すなわち第一質料は、受容することに関して無限の力を有しているが、活動の力は何一つ分有しておらず、またその力〔活動の力〕について言うなら、なんであれ、より形相的になればなるほど、その行為することの力はあふれ出すのである。このことゆえに、すべての元素の中で火が最大度に活動的である。したがって、神は純粹現実態であるので、それには可能態性はまったく混入せず、活動の力が他のものへと無限にあふれ出すのである。

## 第20章

### 神における無限は不完全さを意味しないこと【ST, I, q.4, a.1】

またたとえ、量において見出される無限が不完全なものであっても、それでも神が無限であると言われていることは、彼〔神〕における完全さを証しする。すなわち、量における無限は質料に属し、限界を欠いているがゆえのものである。そして、不完全さは質料が欠如のもとに見出されるかぎり、事物に非必然的に伴うが、完全さはすべて形相に由来する。したがって、神が無限であるのは、形相のみにして現実態のみ〔の御方〕だからであり、質料と可能態が一切混合していないので、その無限は、その〔神の〕最高の完全さに属する。

以上は他の観点からも考察できる。すなわち、たとえ同じ1つのものが不完全なものから完全なものに変わり切るという場合、不完全なものが完全なものよりも〔先にある〕、例えば少年が大人の男性よりも先にあるようにして先にあるとしても、それでも不完全なものはすべて完全なものに起源を置いているのでなければならない。すなわち少年は、大人の男性がなければ生まれることがなく、また種子は動物と植物がなければ生じない。したがって、自然にすべてのものに先んじて存在するものは、すべては動いている〔すなわち出発点が不完全な状態、終着点が完全な状態として動いている〕ので、すべてのものに対して〔それらより先にあるがゆえに必然的にそれらの起源であるから〕より完全なるものでなければならない。

## 第21章

### 神においては諸々の事物においてある、あらゆる完全さが、

### より卓越して存在すること【ST, I, q.4, a.2】

それゆえにまた, どんな事物に見出される完全さでもすべて, 起源として, それがあふれて流れ出ているものとしては神のうちに〔神のもので〕あらねばならない. 完全さに向けて何かを動かすものはすべて, より先に自分のうちに, 動きの向かう先である完全さを有している. 例えば教師がより先に自分のうちに, 他の者たちに伝える教えを有しているように. したがって神は最初の動かすものであり, 他のものをすべて, その〔神の〕完全さに向かわせ入らせるので, 事物の完全さはすべて, 彼〔神〕のうちに先んじて存在し, あふれ流れ出している.

さらにまた, どんな完全さを有するものでもすべて, 他の完全さが欠けているなら, なんらかの類あるいは種のもとに, すなわち形相を通して, 限定されているが, 〔形相は〕事物の完全さであり, どんな事物も類あるいは種の中に置かれる. そして種と類のもとに成り立つものは, 無限の本質を有することができない. すなわちそれによって〔事物が〕種のもとにおかれる最後の種差が本質を限定するのであり, またそれゆえに, 種が分かるようにする概念は定義あるいは規定と言われる. 神の本質が無限であるなら, なんらかの類の, あるいは種の完全さのみを有すること, そして他のものどもを欠いていることは不可能である. だから必然的に, すべての類の, あるいはすべての種の完全さは, 彼〔神〕のうちにあらねばならない.

## 第22章

### 神において, 完全さはすべて, 事物としては一であること

ここより以前に言われたことを総合するなら, 明らかに, 神における完全さはすべて, 事物としては一である. というのは, 既に示されたとおり, 神は一なるものだからである. また, 単純さがあるところに, 様々なものが内在しているということは不可能である. したがって, 神のうちにあらゆるものの完全さがあるなら, そのうちに様々なものがあるのは不可能である. それゆえ〔結論として〕残るのは, 〔完全さは〕すべて彼〔神〕においては一だということである.

また以上のことは, 認識能力について考えても明らかになる. すなわち, より上位の力は下位の諸力によって様々な観点で認識されるものをすべて, 一にして同一の観点から見えて認識する〔力である〕. 視覚, 聴覚, その他の感覚が知覚するものはすべて, 知性が一にして単一の力によって判断するのである.

また同じことが諸々の学の場合にも明らかになる. より下位の諸学は, その関心が関わっている事柄について, 類が多様であるのに応じて多数化する. しかし, 1つの学問がそれら〔諸学〕の中にあつて上位にあり, すべてに関わっている. これが第一哲学と言われ



る。

また同じことが諸々の権力でも明らかになる。すなわち王権の場合、それ〔王権〕は1つであるので、国の統治〔という職務〕のもと多様な職務に分担されている権力すべてを含んでいる。したがって、諸々の完全さも同様に、より下位の諸物で事物が多様であるのに応じて多様化し、必然的に諸物の頂点で、すなわち神において1つになる。

## 第23章

### 神にはどんな偶有も見当たらないこと【ST, I, q.3, a.6】

またそれゆえに、神にはどんな偶有もあり得ないことが明らかになる。というのは、彼〔神〕のうちではすべての完全さが1つになっているからである。そして、完全さに属するのは、存在すること、能力があること、行為すること、そしてそのようなものすべてであり、必然的に、すべては彼〔神〕のうちでその本質と同一になる。それゆえ、それらのうちの何も偶有ではない。

さらにまた、完全さにおいて無限であり得ないものがあり、そのようなものの完全さには何かを付け加えることができる。そして何か、そのなんらかの完全さが偶有だというものがあるなら、偶有はすべて本質にとっては余剰なので必然的に、その本質にはなんらかの完全性が付け加え得ることになる。したがってそのようなものの本質には無限の完全さは見出せない。さて既に示されたとおり<sup>8</sup>、神はその本質によって無限の完全性を有している。したがって、彼〔神〕のうちにある完全性のどれ一つとして偶有ではあり得ない。彼〔神〕のうちにある一つ一つのものはみな、その〔神の〕実体である。

この議論を締めくくるには、彼〔神〕の最高の単純さから〔論じること〕、また〔神が〕純粹現実態であることから〔論じること〕、また〔神が〕存在者のうち第1のものであることから〔論じること〕が有用である。すなわち、偶有の基体に対するあり方はなんらかの複合である。基体であるものは純粹現実態ではあり得ない。偶有の方が、ある意味で形相あるいは基体の現実態だからである。また、自ら存在するものは常に、偶然に存在するものに先んじて存在する。以上すべてから、上で述べたことに従えば次のことが〔結論として〕持てる。神のうちでは何一つとして偶有として語られるべきことはない。

## 第24章

### 神について語られた名の多さはその〔神の〕単純さと対立しないこと

また以上の議論を通して、神について、〔神〕御自身はまったく単純であっても、多くの名が神について語られている、その理由が明らかになる。すなわち、我々の知性はその〔神の〕本質を、それ〔神の本質〕そのままに捉えるのに十分でないので、彼〔神〕の認識に

は、我々の間にある諸々のもの、そこに様々な完全さが見出されるが、それらすべての根っこ起源は、既に示されたとおり、神のうちで一つになっているものから昇って行くということになる。そして、我々は何かを名づける時、[そのものについて何かを] 知っておかなければ [名づけることが] できない(なぜなら名は、理解の印なのだから)ので、我々が神を名づけるためには、他の諸事物に見出される、その起源がその [神の] うちにある諸々の完全性によってでなければ [名づけることが] できない。これらは、諸々の事物のうちで多数化しているの、多くの名を神に付けることは必然である。

さて、その [神の] 本質をそのまま見たとしたら、名前が多いということはそのまま残されはせず、彼 [神] に関する単純な知だけがあるということになっただろう。例えば、神は彼 [神] の単純な本質であるといったような。そしてこのことは、我々の栄光の日 [我々が栄光を受ける日] に待ち望んでいることである。ザカリヤ書の最後にこうあるように。「かの日には主は一つであり、その名も一つである」。

## 第25章

**たとえ様々な名が神について語られているとしても、  
それらの名は1つの意味だけを有する語ではないこと【ST, I, q.13, a.4】**

さて、以上のことから我々は3つのことを考えることができる。その最初のものは、様々な名が、神におけるそのものとしては同一のことを示しているとしても、1つの意味だけを有する語ではないということである。すなわち、ある諸々の名が1つの意味だけを有する語であるためには、それらの [1つの意味だけを有する語である] 名は同一の事物を示すか、知性にある [知性の側の] 同一の概念を表しているの でなければならない。しかし、それら [1つの意味だけを有する語である名] は、同一の事物を様々な概念に即して、すなわち知性はその事物について有する理解に即して示しているのであって、それらは1つの意味だけを有する名ではない。名が直接指し示しているのは [様々な] 諸事物への [様々な] 類似物である知性の [様々な] 概念であるので、[名は] どこまでも同一の表示だということはないからである。

そしてそれゆえ、神について言われた様々な名は、我々の知性が様々な彼 [神] について有する様々な概念を表すので、1つの意味だけを有する語ではない。たとえ、まったく同一の事物を指し示しているのだとしても。

---

### 註

<sup>1</sup> ピペルノのレギナルドゥス。ドミニコ会によって任命されたトマスの僚友 *socius*、すなわち助手であり、友人である存在であった。

- 
- 2 『エンキリディオン』第3章
  - 3 「ヘブライ人への手紙」第11章第1節
  - 4 「ヨハネによる福音」第17章第3節
  - 5 「ヨハネによる福音」第14章第3～4節
  - 6 『神学大全』第1部第2問第3項参照.
  - 7 ボエティウス『哲学の慰め』第5巻第6散文
  - 8 本書第18章および第20章